葬儀屋は死なせない

「いっそ私の葬儀でもやるか？」

葬儀屋が言う冗談としては少々不謹慎だったようだ。

私が社長を務めるこの葬儀屋は、父の代から続く小さな会社だ。社員は四人。そのうち三人は父の代から働いている。ついさっき全員を事務所に集め、会社の口座に残っている金と、ここ数か月の葬儀件数、今後の見通しを説明した。

要するに、もう長くない。このまま依頼が増えなければ、数か月で廃業する。

事務所には重たい沈黙が落ちた。その空気に耐えられず、私はつい口を開いた。社長自ら死ねば、一件仕事が増える。親父の代から働く社員たちへの優しさが生んだ、気の利いたユーモアのはずだった。しかし誰も笑わない。「社長、さすがに不謹慎ですよ？」と指摘する者さえいなかった。

私は咳払いをして、話を続けた。

「確かにこのままでは廃業だ。だが君たちが肩を落として嘆いているだけなら、本当に未来はない。葬儀屋がお通夜ムードでどうする？やれることはまだある。ピンチはチャンスだ。今こそ一致団結してこの苦境を乗り越えよう。ここからが火葬場だ。諸君、手に手を取り合い、この葬儀屋を立て直そうではないか！」

「ここからが火葬場だ」にも誰ひとり笑わなかった。彼らを焚き付けるには、火葬より時間がかかるようだ。私は弱小サッカーチームの監督さながら手を叩いた。

「さて、ここでひとつ提案がある」

黒のマーカーを手に、すっかり汚れて白くないホワイトボードの前に立つ。

「我が葬儀屋のマスコットを作るのはどうだろう？銀行や不動産屋だって、可愛らしいマスコットでお堅いイメージを払拭し、親近感を持たせている。葬儀屋がこの流れに乗らない手はない。そこで私が考えたのが、パンダだ。女性ウケもいい。白黒で企業カラーとして申し分ない。そして、このパンダを棺桶に入れる。いや、完全に入れると死んでるように見えるから、上半身だけ起こそう。棺桶からひょこっと顔を出して、笑顔で片手を上げて、『いってきまーす！』みたいな。元気で明るい感じがいい。ほかにもセリフのアイデアがあればみんなからも意見が欲しいのだが」

静まりかえる事務室。誰も反応しない。もしかしたら私は死んでいるのかもしれない。軋む椅子に腰を下ろし、こぼれそうな涙を貧乏ゆすりでかき消した。

すっかり夜になり、ひとり事務所に残ってテレビを見ていた。日本一の長寿村の特集だった。炎天下で畑仕事をする老婆が「毎日を何事もなく楽しく暮らせたら、それだけでいい」と笑う。VTR が終わり、若い俳優が「日本一の長寿村は日本一の幸福村なんだと思いました」とコメントした。

そんなわけがない。この村の葬儀屋は日本一不幸だ。

テレビを消し、戸締まりをしてシャッターを下ろす。隣の車庫をのぞいた。この古びた霊柩車も手放す時が来たのかもしれない。中古の霊柩車は売れるのか？

運転席に乗り込み、座席を最大まで倒す。目を閉じると、親父の記憶が蘇った。

親父は粗野で、とにかく口が悪かった。

「信じられるか？　あのババア、葬儀代ケチろうとしやがった。しまいにゃ精進落としまで削ろうとしやがって。居酒屋でお通しカットするのとわけが違うんだぜ」

毎日こんな調子だった。坊さんと取っ組み合いになり、「おといきやがれ」と焼香をぶちまけたこともある。

最も異常だったのは、霊柩車を私用していたことだ。送り迎えも外食もいつも霊柩車だった。二人で湘南を走ったこともある。霊柩車から爆音で夏の歌謡曲が漏れ、私は全開の窓からこちらを訝しげに見る人々を無表情で見返した。

親父は涼しい顔で言った。

「霊柩車を見たら親指を隠せって言うだろ？親の死に目に会えなくなるからって。でも運転手はどうすんだ？絶対親に会えねえじゃねえか。こうやって四本指で運転しろってのか？まあ、できねえことも」

次の瞬間、事故に遭い、親父は死んだ。

家族や親類は私が軽傷だったことを喜び、親父には「天罰だ」とまで言った。そう言われても仕方のない人間だったのかもしれない。それでも私は親父が嫌いではなかった。むしろ好きだったのだと思う。あの霊柩車の助手席に座っている時だけは、親父を独り占めできた。爆音の歌謡曲も、くだらない冗談も、もう二度と聞けない。

だからこそ、この葬儀屋だけは守りたかった。親父が残したものを、私の代で終わらせたくなかった。だが、どうすることもできない。

「いっそ私の葬儀でもやるか？」

さっきの冗談が冗談でなくなりそうだった。

このまま目を閉じたまま、私の朝だけ来なければ。

目を覚ます。午前二時三十六分。深夜のあの世か？いや、深夜のこの世の地獄だ。終電はない。結局、霊柩車を動かすことにした。これがこの車の本当の最期かもしれない。ウィンカーを出しながら、自分の人生がどちらへ向かうべきか考える。他社の葬儀に紛れ込んで香典泥棒でもやってやろうか。

交差点で止まる。向かいのビルの屋上に消費者金融の巨大な看板が見えた。両目がお金のマークになった下品なリスが、利息ゼロだと騒いでいる。

絶対に私のパンダの方がいい。

睨んでいると、看板の端で何かが動いた。人だ。中年くらいの男が柵のそばに立っている。こんな時間に何をしている？

男が柵に手をかけた。片足を持ち上げる。

まさか。

信号が青になるや否や、私は霊柩車をビルの真下まで走らせた。車を飛び出し、階段を駆け上がる。屋上の扉を開ける。男は裸足で、足元には揃えられた靴。その上に「遺書」と書かれた封筒があった。

間違いない。

ビジネスチャンスだ。

「まさかあんた、そこから飛び降りるつもりか？」

男は暗い街を見下ろしたまま答えた。

「……だとしたら、なんですか？」

（うちで葬儀しないか？）

喉まで出かかった言葉を飲み込む。さすがに唐突すぎる。慎重にいかなければ。

「少し私と話をしないか？」

「あなたには関係ないでしょ」

「私の目の前で人が死のうとしている。関係ないことはない」

「来ないでください」

私は踏み出しかけた足を止めた。

「帰ってください」

「それはできない」

「邪魔しないでください」

「邪魔をする気はない。むしろ逆だ」

男が振り返った。

「……あなた、一体誰なんですか？」

今夜は満月だった。涼しい風が頬を撫でた。急に自分の仕事が誇らしくなった。

「通りすがりの葬儀屋だ」

私はゆっくり一歩近づく。男の指が柵を強く握った。

「いいかい。君が死んだら、一体どれだけの人が悲しむと思う？」

「そんなの、わかりませんよ」

「家族は？　友達は？　職場の同僚は？」

「やめてください」

「君の周りにいる人間の顔を思い出すんだ」

「わかりたくもない」

男は強く目を瞑った。柵の向こう側で足がわずかに動く。私は息を呑んだ。

「想像してみろ。君が死んだと知った時、誰が悲しむ？誰が泣く？そして誰が君の葬儀に駆けつける？」

「知りませんよ！」

男の声が夜の屋上に響いた。私は慎重に言葉を選ぶ。

「大体でいい。大体何人来る？」

男は柵を握ったまま、訝しげに私を見つめた。「……何が目的なんですか？」

「君の死を悲しむ人間がいるってことを想像してほしいんだ」

「そんな人いませんよ」

「でも葬儀には来るだろ？」

「来たって、どうせ形だけですよ」

「形だけでもいい。葬儀っていうのは気持ちじゃない。数だ。参列者の人数だ」

男がこちらを向いた。しばらく私を睨んでいたが、やがて溜め込んでいたものを吐き出すように喋り始めた。

「だったらもう言わせてもらいますけどね！私は会社でお荷物扱いされて真っ先にリストラされて、女房には愛想を尽かされ、子供を連れて出ていかれた。友達だって誰もいない！天涯孤独なんです！私が死んで葬儀をやったって、誰も来やしませんよ！」

男は天を仰いで笑った。

その瞬間、私の腹の底から熱いものがせり上がった。

「だったら死ぬな！」

男がびくりと背筋を伸ばした。

「だったら生きろ！長生きしろ！もっとたくさん生きて、もっとたくさん人とのつながりを作って、よし、よしよし、これだったら集客が見込める！そう確信できた時、お亡くなりになりなさい！」

男は唖然としていた。

「葬儀がやりたい！その気持ちはよくわかる！しかし葬儀というのは、」

「ちょっと待ってください！」

「なんだ？」

「葬儀はやりません！」

「え？」

男は柵の向こうからこちら側へ戻った。

「もう、死にたくないです！」

「は？え、だってさっき……」

「あなたと話していたら、なんか冷静になってきました。さっきまで本気で死ぬつもりだったのに。何やってるんだろうって。死ぬのがバカバカしくなってきて」

私はただ呆然と男の顔を見つめていた。さっきまで柵の向こうにいた人間が、今は私の目の前に立っている。

男は少し照れくさそうに言った。

「だから、もう少しだけ、生きてみようかなって、今は思います」

その瞬間、涙が溢れた。

親父が死んだ時にも、会社が潰れそうになった時にも出なかった涙が、止めようもなく次から次へとこぼれた。

「だ、大丈夫ですか？」

「……もてあそんだな？」

「え？」

「葬儀屋をもてあそんだな！」

私は男に向かって一歩踏み出した。

男が後ずさる。

もう一歩。

男の背中が柵にぶつかった。それでも私は足を止めなかった。

「ちょ、ちょっと……」

男の顔が引きつる。

涙が頬を伝った。私はすぐに袖で拭った。もう一度拭った。それでも次の涙が落ちてきた。鼻をすすり、何度か瞬きをする。街の明かりが涙で滲んでいた。

「お前なんか……」声がかすれた。

私は唇を噛み、もう一度息を吸った。

「お前なんか……ずっと生きてろ！」

私は人差し指を突きつけた。指先が小さく震えている。

「勝手に死んだら殺す！」

風が二人の間を吹き抜けた。

男は目を丸くしたまま立っていた。

私は踵を返すと、階段を転がり落ちるように駆け下りた。ビルを飛び出し、車に飛び乗る。頭突きでクラクションを二度鳴らし、そのまま霊柩車で夜の街へ走り去った。